

回顧録

社会学部の設立構想とその経緯 — 思い出することなど

中條 毅[†]

序 文

- 1 軍権力による介入—2つの事件
- 2 同志社高商の右傾化ナショナリズム
- 3 報国団の結成
- 4 厚生学専攻の設置—産業関係学の萌芽
- 5 神学科社会事業専攻→厚生学
- 6 大学進学（厚生学専攻）
- 7 厚生学専攻のカリキュラム
- 8 荒木貞夫（文部大臣陸軍大将）と同志社厚生学
- 9 文学部社会学科の設置
- 10 留学（イリノイ大学労使関係研究所他）
- 11 産業関係学・学科・社会学部の設立

結 び

註(1)～註(18)

序 文

文学部神学科社会事業専攻から発展した厚生学科は、その創設当初から社会科学の学問体系として社会学部の創設を指向した。当時の牧野虎次総長⁽¹⁾、竹中勝男教授、学生自主講座の責任者だった私の展望は暗黙のうちに通じ合っていた。戦時下での新しい学問体系の追求、軍事権力との抗争・調整、学徒出陣という人生の大難、戦後の学生運動、混乱を通してみた70年の史的考察。キリスト教主義教育の大学に対する戦時中の国家権力の介入や軍の統制・監視、特高警察による下宿への踏み込み捜査等、至難な生活のあと学徒出陣⁽²⁾で戦線に。そこに刺棘の道があったことを想起すると、何とも感慨深い。

復員後、戦時急造の厚生学専攻に対する学生の反発・批判が相次ぎ、復員学生による社会学部構想の真摯な論議と対策の提起が続けられたが、なかなか実現には至らなかつ

[†]1939～1944 年在学，1949～1991 年在職

た。2005年（平成17年）に社会学部が5学科の構成で創設されたことにより、余りにも長い建設の歴史が終わり、新しい構想が日の目を見ることができた。現学部の方々に感謝を申し上げたい。

戦時下に始まった社会学部創設の黎明期とその苦難の歴史を記して一つの資料としたい。

1 軍権力による介入－2つの事件

社会学部の設立構想は、実質的には第2次世界大戦中にできていたと私は考えている。この経緯を説明する前に、まず同志社に対する軍権力からの弾圧があったことを述べておかなければならない。なぜなら、米国留学した新島襄によって設立されたキリスト教主義教育を実践する同志社をことさら問題視した軍が学校運営に度々介入してくる中、同志社がその精神を失わずに存続し続ける道を模索した結果が、社会学部の設立構想につながっていると考えるからである。

軍による介入の一つの例は1935年（昭和10年）の神棚事件である。当時、同志社には大学のほかに、私が入学した高等商業（現商学部の前身。以下、高商と称す）という専門学校があった。室戸台風で壊れた高商の剣道場が新築され、和歌山高商や関学高商といった各高商から剣道部員を招いて祝賀会を開いた際、ある部員が出町で神棚を買ってきて道場に祀ったところ、剣道部部长で宗教部長でもあった喜多直之助がそれに気づいて学校当局に知らせ、鷲尾健治校長が柔剣道部の理事を説得して、両部員の手で自主的に神棚が取り払われるという出来事があった。そのことが配属将校の三浦国雄中佐の知るところとなり「問題」となった。配属将校は、校長や総長の指揮下に入らず直接学生を指導する権限を有しており、陸軍に「教練」の成績を送る役割を担っていた。三浦中佐は、鷲尾校長に神棚を祀ることを要請したが、剣道部から理事以下一同連名で神棚を取り払ったことについての謝罪状が提出されたものの、高商として神棚設置を承認するとの明確な回答が得られなかったため、三浦中佐は軍に引き揚げてしまった。配属将校の軍への引き揚げは、大学や高商の学生に許されていた「徴兵延期」の特権が認められなくなることを意味した。また、配属将校が担当する「教練」を履修した学生には、徴兵された場合に幹部候補生に命じられる資格が与えられたことから、幹部候補生への道も断たれる。高商および学生の双方にとってきわめて深刻な事態に陥ったが、なお理事会では結論に至らなかった。最終的に陸軍第16師団の渋谷伊之彦司令官の圧力に屈する形で、理事会は剣道場への神棚設置を承認することを決定。翌日、湯浅八郎総長と理事2名が第16師団に同司令官を訪問し、神棚設置の問題が解決したことを報告したことにより事態は終結した。

軍による介入のもうひとつの例は、1937年（昭和12年）のチャペル籠城事件である。配属将校の草川靖中佐の示唆により国防研究会の予科生(3)330名がチャペルに立て籠もって学生集会を開催し、大学に対して同志社改革および国体明徴について要求書を提出したが、柴山健三予科長および湯浅総長はいずれの要求も拒否した。翌日、学生代表と京都府警特高課長らによる会見を経て籠城は解かれ、特高警察は学生たちの無処分を大学に要請したが、教授会は12名の首謀学生を学園の秩序と治安を乱したとして譴責処分とすることを決定したことから問題が拡大した。教授会で処分すべきと強く主張したのは、反権力的・進歩的な新村猛教授と真下信一教授であったが、教授会での発言内容をすべて察知していた特高警察によって両教授は検挙され、程なく依願退職によって同志社を去った。事態の収拾に向けた努力が尽くされたが、最終的に湯浅総長、柴山予科長、大塚大学長の辞任をもって事態は収束したのである。神棚事件に比べて、チャペル籠城事件では学生の行動自体が右傾化したことが伺われる。戦時下の同志社は、大学、高商ともにナショナリズムの嵐が学内に急速に吹き込んできたのである。

2 同志社高商の右傾化ナショナリズム

日本が Socialism, Romanticism, Nihilism から Nationalism に移行しつつあった中、満州に飛び出して日本企業で働いていた私は、日本人が満州で生活を送る上では関東軍に力強さを感じつつも、「権力」の反対側に立った場合の困苦（反権力側の苦痛）について考えると、日本の植民地政策に大いなる疑問を抱くことがあった。そんな折、国境の町・安東の教会で同志社出身の平松政男牧師に巡り会った。平松牧師から「人間形成のため神学を学び、再度渡満せよ」と説かれ、帰国して同志社大学神学科の門を叩こうとしたが、しかし、厳父に「耶穌は認めぬ」と一喝され、ひとまず岩倉の同志社高等商業に席を置くことにした。その高商で思いもよらぬ人生の大きな試練が待ち構えようとは、そして、その試練が長い苦悩の歴史を重ねて新学部の道程に連なることになろうとは、当時は考えるすべもなかった。

1939年（昭和14年）4月の入学式では、式辞の途中で配属将校の熊本大佐がいきなり軍靴を蹴って壇上に上り、一千人余りの高商生を前にして机を叩いて叱咤激励の名演説を行った。長州・岩国出身の熊本大佐によるその演説は、「何という不躰、無礼。これが上級学校の学生の態度なりや。諸君の自覚に訴える」という趣旨の見事なものであり、新入生の私は熊本大佐のその言動に共鳴した。同志社の「神棚事件」や「チャペル籠城事件」のことは耳にしていたが、熊本大佐のスマートさからは、事件当時の配属将校の姿は想像できなかった。満州帰り再出発の私にとって、この不躰な新入生および上級生の態度に寧ろ落胆したが、叡南寮の幹事には好感のもてる指導者であった足立大佐

が出入りし、寮長等の幹部もよかった。上級生の学友会リーダーとして旧制松本高校を左翼学生運動により放校となった魅力ある先輩が学術・文化活動をリードしていたことは心強く、そして何よりも宗教等を通して抜群の業績を示していた飯清等の同窓生がいたことは誇らしいことであった。

私の学年は、中学校卒業組が A・B・C の 3 クラス、商業学校卒業組が D・E の 2 クラスで、この年から商業学校卒業組が 2 クラスに増えた。入学倍率は中学校出身者の 3 倍に対し、商業学校出身者は 30 倍である。商業学校から高商への進学者が急増したのは日米開戦の直前からで、これは偏に高商学生に許された「兵役延期」の特権を求めてのことであった。戦時景気が影響したかもしれない。経済的に余裕のある商家では、子弟を商業学校に通わせることが多かったが、商業学校では兵役延期の特権が認められないため、商業学校から進学できる高商への入学希望者が急増したのである。また、これは終戦後に聞いた話だが、高商で 1 年後輩だった N 氏の実家は大阪造幣局本局一帯の大地主だったので、陸軍にその大部分を寄付して兵役を免れたという。そういえば、軍隊に入っても故郷の部隊に留まり、一度も戦線に出なかった輩がいた。当時、兵役をいかに免れるかは死活問題であり、このような事情から商業学校出身者のクラスは高商（専門学校）への進学が急増し、また入学倍率の高さから自ずとガリ勉型が主流になった。復員後は銀行や商社等といった一流会社に就職したが、戦後復興から高度経済成長期にかけての激務のためか、残念ながら長命の人は少ない。ただ、日銀に入行した同級の 6 名は皆、長命であった。他方、中学校卒業組には留年する者が多かったが、地方出身のおおらかな傑物、味わいのある好人物が多くいた。

山陽道の名門中学から進学した同級生の M 君は、同志社高商学友会を強力にリードした。「神棚事件」以降、同志社高商の学生は、兵役延期、入隊後の幹部候補生合否の問題等を警戒あるいは意識してか、国内に広がる戦争拡大、軍権力強化の動きに符合するように、学内にナショナリズム・右傾化の空気が一気に蔓延した。関西地域の富裕層の子弟が多かった同志社大学生に比して、高商には地方出身の学生が多くバンカラの気風が支配した(4)。比叡山麓の大自然に位置する岩倉キャンパスの校舎は簡素で、学生は教練服に下駄履きとまったく野暮であった。鐘が静かに鳴るチャペル、アーモスト、クラークハウス等クラシックな赤煉瓦の今出川キャンパスとは異なった環境により、学風も全く異なり、校旗も学友会も同じでなく、戦時下、軍権力の広がりと共に、高商で右傾化が強化されていったことは不思議ではなかった。

名校長と誉高い鷺尾健治校長が逝去された後、私たちが入学した前年の 9 月 23 日に、埼玉県と和歌山県の知事を歴任した野手耐氏が校長に就任していた。因みに、その 2 日後に鷺尾前校長の胸像除幕式が高商西門左側で行われている。野手校長は赤い強面で、私は初対面で話したときから見下すような態度で高圧的に怒鳴られた。ところが、学友

会の委員長 M 氏の前では豹変して、優しく声色も変わっていた。和歌山県知事を病気の為 1 年 9 カ月で辞任されていたことから、それが校長の病状によるものか、あるいは私の態度が悪かったからなのかと考えてみたが、結局答えは判らなかつた。その野手校長と M 学友会委員長との結束、熱狂が昭和 15 年頃から舞い上がり、これに行動、運命を共にしようとする動きが学内に広がったのである。折しも、今出川キャンパスでは赤煉瓦の立派な校舎で大学生が学んでいたが、岩倉の高商には粗末な校舎しかなく、キャンパス環境の格差は一目瞭然であった。大学予科の入学定員 200 人に対して、高商はそれを上回っていたことから、高商はまさに「同志社のドル箱」との声も上がった。キャンパス環境の大きな違いから独立運動さえ湧き起こり、岩倉の高商は独立採算で「商科大学へ」という叫びが上がったのである。満州から失意のうちに戻ってきた私は、学生運動よりも専ら学術班、宗教班に関心をもち、こうした反今出川運動、学友会の動向に異論を示す余裕が無かつた。とはいえ、左翼文献はすっかり消えてゴツトルが台頭し、ピグーが精一杯というところであり、学術も思うようには捗らなかつた。

3 報国団の結成

学友会学生運動が盛り上がる中で学校の指令で「報国団」なるものが結成された。1940 年（昭和 15 年）12 月 4 日、各運動部その他の各部の解散式および「報国団」の結団式が行われている。暫くして、私は学校（教授会）から呼び出しを受け、「報国団」幹事三組織の責任者となるよう告げられた。この指令に私はかなり当惑したが、上司の指示から逃げることは一種の恥だと思われていた時代である。結局、この指令を拒否することはできず、1941 年 1 月 16 日に私は「報国団」指導班幹事に正式に任命された。余裕はまったく無かつた。その後、1941 年 8 月 8 日に文部省訓令「学校報国団体確立方」が出されて、全大学・高商に対して「報国団」の結成が命じられたのである。

学友会が時の軍権力を背景とする野手校長と結束し、それが教授会と相対置する動きであることに気づいたのは、私が「報国団」組織の責任者に指名されてからのことであつた。とはいえ、学友会およびその周辺の動きを気にすることなく、私は「報国団」幹事として淡々とクラス委員を動員して学内行事を行い、また高商並びに大学の教授達を訪ねてお話を聞くことができた。大学の田畑忍教授（法）をはじめ、宗藤圭三教授（経）、岡村正人教授（商）、牧野虎次総長、神学科の教授、上野直蔵教授、さらに徳永清行、大河内一男等の学外の教授にも鄭重にご指導いただけた。これはまことに大きな収穫であつた。しかし旧学友会を囲む「小集団」から指令が出て神棚のある道場に独り正座させられ、大きい集団の前で「査問」を受けることが続いた。

柄に合わない応援団団長までやらされたが、その活動を通して地方出身の逞しい運動

選手たちとの交流が密になった。音楽関係の倶楽部活動その他、岩倉、修学院等周辺の麦刈り、稲刈りも学生を動員し、さらに今出川の大学の「報国団」幹事（羽田、滝川春雄の二人とも京大総長の子息）と交流を行い、両校の雰囲気の違いに就いて論じ意気投合した。その一方で、教会活動（下鴨教会）と大学受験準備は中学校時代の不覚と同様に空白となり、その不覚は私の人生訓となった。下鴨教会には平松牧師が帰国していた。

誰が私を報国団指導班幹事に指名したかについて、当時は考える余裕もなかったが、いまにして思えば、徳富蘇峰ゆかりの熊本バンド出身の学生部長 O 教授の姿が思い起こされる。小さい体で大きな靴を履き、桁外れに気概のあるキリスト教徒であったが、スマートさは些かもなく学生からは敬遠されていた。この人と下鴨から岩倉まで山を超えて通ったことがあった。尾道商業から来た同窓の児玉祐吉（海軍大尉・予科練教官）も一緒だった。児玉の叔父は京大の学生部長であった。児玉とともに O 教授から戦時下の学生のあり方を伺いなどして話し合った山越え道中であった。

一方、学友会の背景には小集団めいたものがあり、萩中学出身の M 氏がそこで睨みを利かしていた。M 氏は、二～三年上の再修の巨漢で赤ら顔のボスだった。当時、都大路を羽織袴でのし歩いた武道専門学校の学生たちでさえ「赤が来たぞ」と云って道を譲ったという。文化活動も達者な大親分であった。敗戦後 10 年余りが経過し、私がイリノイ大学留学中に一年下の高商報国団員であった N 氏が訪ねて来て、「赤」がボスだった「成らず者集団」について話をしてくれた。「成らず者集団」とは、「卒業成らず」「履修成らず」の小集団という意味で、悪知恵ばかり搾る「いかれ者」の集まりであった。裕福な家庭の子息の中には 1 年ずつ落第しながら兵役延期を引き伸ばす輩もいたが、2 年続けて落第すると放校となるので、その点では抜群に智慧を働かせる学内の浪人たちが、最後に何をやったかは結局判らず終いである。そのまま「12 月会」の同窓生は繰上げ卒業、戦線へと一斉に散って行ったが、小集団の連中は未卒業のまま戦線で果てたとも云われる(5)。野手校長は故郷広島で原爆の犠牲になったと云われる。親しかった広島の同窓生と共に、亡き校長の無常の風に哀悼の意を表した。

また、下駄を手にもち素足で教授会開催中の部屋の前の廊下で盗み聞きする「成らず者集団」の学生がおり、教授会の動きは筒抜け状態であった。アメリカの大学に留学した年輩教授も多く、その中で軍権力を批判したり、キリスト教主義教育を尊重しようとする根強い世界観や信条をもつ教授の発言は、右傾化が進む高商の中ではひととき目立ち、学生に対して強い態度に出れば、右翼学生運動はそれだけ強く反発し、批判した。学友会を主体とする学生運動は強力な新島精神の保持者で、理想と情熱でキリスト教主義教育、同志社精神を貫いた川島良一教授(6)など数名の教授の追放運動に乗り出し、同志社本部や理事への批判、一言で言えば反今出川運動を拡大させた。権力を背景とし

て若い力が一体となって動く集団の力は異常に舞い上がり、収拾も対応も至難のわざであった。しかし、「報国団」が軌道に乗った頃は旧学友会運動も下火になり両者の対立もなかった。何よりも戦線への動員で学内同窓が空になったことが大きい。権力は自ら事件を起こしてこれを利用し、自らの主張と流れを強化拡大する。すなわち、「他を征服し同化し強大化への意欲」(ニーチェ)にほかならない。ロマン・ローラン曰く「思想又は力によって成功した人々を英雄と呼ばない。心によって偉大であった人々だけを英雄と呼ぶ」と。権力とそれを背景とする集団、満州の生活以来私の頭に残った。

4 厚生学専攻の設置－産業関係学の萌芽

私が高商に入学した1939年(昭和14年)は、ドイツがポーランドに侵入して第二次世界大戦が勃発し、日本はノモンハン事件でソ連軍に敗退して南方へ反転し、「幕僚統帥」(7)が先鋭化した年である。前年4月には、国家総動員法が制定され、秋には同志社今出川キャンパスのチャペル前に奉安殿が設置された。1940年には日本軍が仏印武力進駐(日米開戦の予令)し、翌年12月には、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まる。国内外の情勢が緊迫したその年の秋に同志社寄付行為の大改正が行われた。すなわち、『本法人の維持する学校は皇国民の練成を目的とし、之に適合する基督教の精神を採って徳育に資す』として、キリスト教教育ではなく「キリスト教主義教育」であることが強調された。設立以来キリスト教主義教育を実践してきた同志社は、軍権力の弾圧によって存亡の危機に瀕していた。とりわけ、キリスト教の牙城であった神学科を軍が問題視していたことから、その規模縮小を余儀なくされ文学部の改編・改組が進められた(図1)。まさに同志社の存続をかけた大改編であった。当時の大学は法学部と文学部の2学部で構成され、神学は文学部神学科、経済学は法学部経済学科とされていた。文学部には神学科のほかに英文学科、哲学科の3学科があったが、1941年に神学科と英文

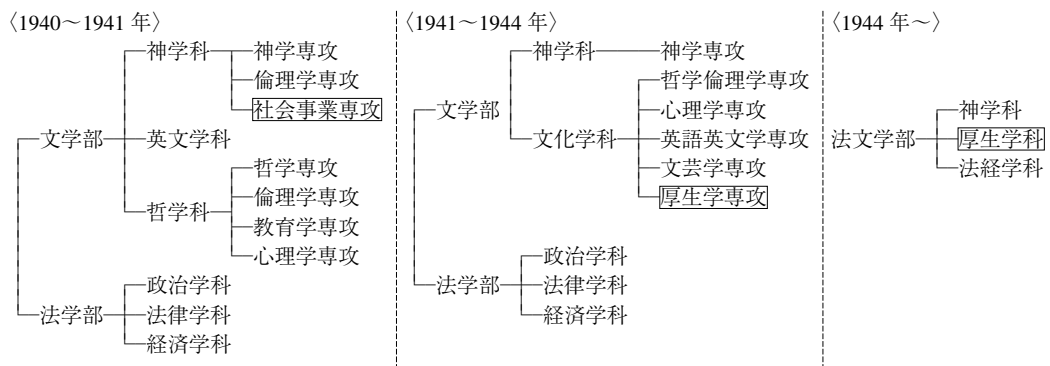


図1 戦時下における学部改編 (1940年～1944年)

学科の規模縮小を中心とした文学部の改組が行われた。これにより神学科は、神学専攻、倫理学専攻、社会事業専攻の3専攻から神学専攻だけになり、また英文学科と哲学科が廃止統合されて文化学科が新設され、その中に英語英文学専攻が置かれることになった。神学科にあった倫理学専攻は哲学倫理学専攻として、同じく社会事業学専攻は厚生学専攻として、それぞれ文化学科に設置された。軍の弾圧から神学科を死守せんがための苦肉の策であった。この厚生学専攻こそが社会学部の前身である。

その厚生学専攻に私たちは入学した。しかし、神学科の社会事業専攻を厚生学専攻という名称を変更したのみで、その内実は神学と余り違いのないものである。たとえば、社会事業専攻には、竹中勝男教授と竹内愛二教授と大林宗嗣教授の3教授がおられたが、社会事業関連の講義を担当されたのは前二者だけであった。この二人がそのまま厚生学専攻の教授になったが、しかし、私たちが受けたこのお二人が担当された講義だけではなくて、神学理論を中心とした神学専攻の授業が大部分であった。

厚生学に関する最初の文献は『厚生學年報第1輯』（昭和17年）（図2）であり、竹中勝男教授は、「社会事業に於ける『厚生』の原理」と題する論文で、「厚生学とは国民の生命的、生活的根底を豊かに確保育成することを目的とし、人的資源の保護培養」と記している。軍による介入及び圧力を避けるために、「人的資源」という用語が用いられており、まさに戦時社会政策につながる考え方であった。さらに「社会事業は、社会政策的代替の役割を負わされた救貧事業の失敗に対する対策として発生した」との反省から、『社会的脱落者のみを対象とせず生産面の労働力の保護培養』として、救貧事業のみにとどまらない社会改良的实践にあると謳った。この生産に従事する現役労働力の保護培養という考え方は産業関係学に通ずるものであり、戦前にその萌芽があったのである。神学の社会事業を厚生学に置き換えることにより同志社の危機に対応した竹中勝男教授の至難な成果を評価しなければならない。

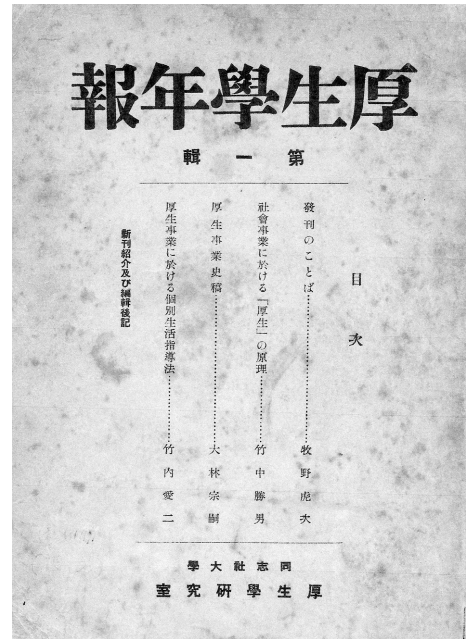


図2 『厚生學年報 第1輯』の表紙

5 神学科社会事業専攻→厚生学

しかし、結局のところ同志社の本音は神学科をいかに保持するかということであった。この体制で戦争を乗り切り、終戦の暁には神学科社会事業を復活させることが念頭にあったと察せられる。その証拠に、戦後になって社会学部設置直前の大学理事会において、厚生学専攻を戦前のように神学科社会事業に戻そうという動きがあった(8)。

終戦後のある日、助教授だった嶋田啓一郎先生から、「一大事なので直ぐに大学に来てもらいたい」という連絡を私は受けた。職場だった京都府労働委員会から駆けつけて今出川キャンパスに着くや否や「理事会で厚生学を神学に戻すべく議論されているらしい。直ぐに理事会に出て、君の意見を述べてもらいたい。社会福祉学のピンチだ」とかなり興奮した様子で訴えてこられた。憲章を外した軍服に身を包んだ私は、失礼を承知で会議中の理事会に単身乗り込んだ。安東先生は、同志社そしてキリスト教界の長老、有力者であり、30歳余りの嶋田先生の狼狽ぶりは判らないではなかった。安藤理事長は開口一番、「キリスト教をバックボーンとした社会事業の推進が同志社の真髓であり、輝かしいその伝統を継承することが肝要である。軍権力の圧力に屈した時代はもはや過去となり、新制大学への移行に合わせて、同志社キリスト教社会事業を切り離すことは決して許されない」と力説された。

キリスト教社会事業と同志社神学、この結びつきは私も十分了解していたし、満州時代に平松牧師と語り合った大事な課題でもあった。その点では安東先生のご意見に一理ありとは思いながらも、しかし、牧野総長や竹中教授と高商の学生代表であった私との間で、厚生学専攻を社会学部に充実・発展させることを確約し、それを前提に高商からの進学者を取りまとめたこと、また教授陣のみならず学生による自主講座によって同専攻のカリキュラムを整備してきた経緯等について説明した。いま厚生学専攻を神学に戻すことはきびしい論議とその史的経過からみて許されるものではないと語気を強めて訴えた。復員学生達による抗議活動が治まりつつあるとはいえ、厚生学そのものに対する学生の批判反発は残っていると論じたが安東氏はそれ以上議論を続けるのを止められた。その後、理事会の雰囲気は平静に戻ったが、病後の嶋田先生の興奮が止まない様子が少し気になった。

そもそも、厚生学専攻の出発点は、人的資源の保護と培養を目的とすることであった(牧野虎次「発刊のことば」『厚生學年報第1輯』)。厚生学の発展を期待して、その教育後援会会報で小泉厚生大臣も「国民生活の根本問題を研究する総合的科学として評価し、発展を期待する」と記し、その激励のため、東條首相の特別機で同志社に駆けつけ、自主講座の学生も会議に参加している(同志社大學厚生學教育後援會會報・昭和18



図3 同志社大学厚生学教育後援會會報（昭和18年）

年）(図3)。社会事業が厚生学として理論的に体系づけられた序説から始まり、歴史的には最低生活保護という応急的消極的性格、慈恵の恣意的性質から人的資源の確保、国民生活の安定という積極的計画性に進展、社会改良主義と直接関係を持ち、契機を同じくする社会政策の発生過程と一定の関係を持ち、不分明な概念によって発足したと説明されている（竹中勝男「社会事業に於ける「厚生」の原理」『厚生學年報第1輯』）(図2)。シカゴ大学で社会事業を、東京大学で大河内一男教授の社会政策を勉強した竹中勝男教授は、資本主義社会発展の変革期と戦時体制が重なったこともあり、戦時下の学会、政治経済のフィールドに積極的に問題を提起していた。

戦時下、社会事業再編の要求が厚生事業として論じられてはいたが（竹中勝男教授他）、大阪商大学長河田氏は「労働者其他無産者の生活に伴う多くの不幸事を慈善事業によって救済せんとする如きことは、政策として極力排斥すべきである」（河田嗣郎『日本社会政策』1937年）と、早くから論じており、大河内一男教授は、「社会事業の生産的任務というものが、これを果すための社会事業の再編成の要求として厚生事

業なるものが把握される」と説明し、さらに生産政策としての社会政策、労働力政策を論じて注目を集めた（大河内一男『社会政策の基本問題』1940年）⁽⁹⁾。

6 大学進学（厚生学専攻）

高商の3年生だった1941年（昭和16年）12月に全国の専門学校に対して繰上げ卒業が命じられ、学生は戦線に出されることになった。学徒出陣の第一段階である。私達の学年が高商に在学したのは2年9カ月であり、ペンを捨て剣をとる「学と軍」の間に挟まれ、きわめて不安定な学生生活に追い込まれた学年であった。同級生は皆1920年前後の生まれであり、日本ではこの年齢層の戦死者が最も多く「惨苦の世代」といわれた。しかし、旧制高等学校、大学予科生、理工科系学生には「兵役延期」の特権が与えられていたので、戦線動員はなく学業が続けられた。同志社大学予科にも当然に兵役延期が認められた。そんなことも影響してか、高商生には焦りがあったかもしれない。ただし、高商のような旧制専門学校の卒業生のうち、卒業成績が上位一割以内の者については大学進学が許された（さらに、2年を超えて浪人および留年したものは不可とされた）。こうした措置によって私は戦線に送り出されることなく、大学進学が許されることになったのである。因みに、同級生で大学に進学した80パーセント以上は商業学校からの進学組で占められた。年が開けて、大部分の繰上げ卒業生は戦線に出されたが、進学組約数十人は3月まで教練はなく、同志社大学の他に京都大学や立命館大学の有名教授の集中講義を聞き、討議を行う等、何とも収穫の多い3カ月であった。

問題は進学先であった。高商からの進学は文学部厚生学専攻のみ、法学部への進学者は予科からのみと限定された。そのため、国立大学の法・経学部へ志望を変える者があり、13名が国立大学に入学した⁽¹⁰⁾。我々の同窓「12月会」からの同志社大学への進学者は、英語英文学専攻1名（瀬口章氏）、神学科1名（飯清氏）で、英語英文学専攻と神学科の学生は韓国（当時の朝鮮）の優秀な女子学生（後の梨花女子大学学長等）、一高や三高出身で体調のすぐれない秀才で占められていた。要するに、戦時下の同志社大学にとって、厚生学の帰趨は、大学当局はもちろん進学する学生にとっても死活問題であった。大学側は戦時下でのキリスト教主義教育のあり方や経営問題を抱え、その対策として「厚生学」を立ち上げたものの、その教科内容も考えねばならず、そもそも「『厚生学』とは何ぞや」といった根本的な課題は明確にされないままであった。荒木貞夫文部大臣（陸軍大将）の動きは、戦時下で到底読み難く、流石に学生側にもその余裕はなかった。牧野総長、竹中教授を中心とする同志社大学も真剣勝負であった。

ただ、厚生学専攻の実態とその将来、そして軍権力の同志社への干渉等について、学生側にも知る権利と責任があったので、報国団幹事としてそれを黙認する訳にはいかな

かった。私は、厚生学専攻創設の竹中勝男教授を研究室に訪ねた。私が訪問することは、高商の原教務部長、川島教授、その他の教授から、竹中教授へ事前に連絡が届いていた。川島教授からは、竹中教授とはアメリカのシカゴ大学およびコロンビア大学大学院時代からの友人であることも知らされていた。竹中勝男教授は、研究室から飛び出してきて私の腕を掴み、やや興奮した様子で応対して下さった。容貌もジェスチャーも日本人とは思えない人で、話の運びもスムーズであった。私は厚生学専攻の評価および批判をまとめていたので率直に諸々の意見を申し述べたが、一向に不愉快な表情もせず、終始、笑顔で真摯に答えて下さった。日本人ではない桁外れの不思議な人物という印象が強い。長く話している間に、「将来は社会学部を創ろう」と、私の希望に応える様に目を輝かせて私の両手を握った。高商に戻ってから川島教授にその話をしたら、「私も竹中君と同じ意見だ。是非、厚生学を充実して将来は社会学部を創設して欲しい」と激励して下さった。しかし、高商の今ひとりの学究肌の教授（国立大学への進学を勧めてくださった方）からは、神学科には確かに優れた教授が揃っているが、社会学部創設は荆棘の道だよ、東京に出た方がよい、ただしそれは君次第だ、と親身な助言をいただいた。学友の佐々生君も同じ意見だったが東京での食糧事情が大変だった。

進学組の親しい何人かと意見を交わしたが、廣島商業出身の3人は国立大学行きを変えなかった。文学部ということと厚生学の内容が不明だという理由からであった。一方、家業を継ぐ身の京都や大阪の商人の子息達は、いま直ぐ戦線に出されるよりも命を3年長らえるという理由で一緒に厚生学専攻を選んだ。意欲的で優秀な貴志敬次と安田宗男には、「いままでの空白を埋めることが第一」と云って誘った。同調したものが他に数人あり、結局30名余りが厚生学に進学することになった。このうち中学校出身者は、和歌山中の貴志と神戸一中の山口明の僅かに2人であった。私が高商の卒業生を代表して答辞を読んだのは牧野総長・原教務部長の前であり、8月に定年退職した野手校長の姿はそこにはなかった。とくに牧野総長も原教務部長（後の商学部長）と共に肩を叩いて激励の言葉を郑重に頂いた。一方、戦線に放り出された同窓生に申し訳ないと思った。

大学進学後、貴志と安田と私の3人で「下鴨会」を作り、厚生学専攻を充実強化する中核を組織し、学生自主講座を作って竹中教授に要求し、新たな教授の任用や講座の設置を教授側に話しかけ、大学側もそれをかなり考慮してくれた。大学進学時の高商および大学の教授との確約が総て効を奏し、厚生館2階全部を学生研究会の場として提供され、学生が毎日討議をやり、教授にも種々の要請をすることができた。これが特高警察からの監視の焦点であることも判っていたが、高商時代とは異なり、軍権力側に対しては竹中勝男教授のスケールの大きさ、インターナショナルな世界観、それに政治力が働いていた（戦後、竹中勝男教授は、社会党から参議院議員として立候補して当選し、参

議院文教委員長に就任している)。大河内一男教授による「戦時社会生産政策」の講義が設置され、労務管理論や産業生理学（いずれも、講義名には「社会」や「労働」の使用を避けていた）の講座を大学側と学生側が相談しながら設定し、学徒出陣の秋には文部大臣、陸軍大将の荒木貞夫が厚生学の激励に訪ねることになった。これらはいずれも竹中教授の働きかけがあったものと察せられるがその間の事情は全くマル秘であった。

厚生館前の「出陣の碑」は自主講座グループによる建立で、植物園からの荷馬車等の費用はすべて自己負担であった。また、昭和19年9月に繰り上げ卒業となって、出陣後に戦線で卒業証書を受け取ったすべての学生（文学部のみならず、予科から上がった法経学部の学生も）の卒業式を、昭和54年（1979年）9月に当時文学部長だった私が召集し、田畑、上野、児玉、松井等戦時下の教授全員が出席。「出陣卒業の碑」を田辺校地に建立。ただ、この日、講演を約束していた海軍同期の吉田満（戦艦大和の最期の著者）が急死、そして角田豊教授も前年9月に天の人となっている。

7 厚生学専攻のカリキュラム

1942年から43年の主要科目について触れておきたい。専任の三人の教授が担当した主要課題は、『福祉政策および労働政策に到る広範な学と体制の整備を重点課題とする研究』であった。刺激を与えられる教科である。荒木貞夫が文部大臣のときに、つぎのような文章が文部省から出されている。『総戦力に備えた戦略としての政治の内容、重工業を中心とする産業政策、教育、福祉厚生、社会労働政策とその体系整備を重点課題とす』と。両者が類似しているのは偶然の一致か、それとも同志社の厚生学を参考に厚生大臣が同様の動きをとったのか、軍機密の戦時下真相は分からない。ただ、高商で報国団が結成されて暫くして、文部省から全国の大学・専門学校に「報国団」の結成が発令された動きと符合する話でもある。

主科目である『厚生学原理』は牧野虎次総長、『国民厚生事業論』は竹中勝男教授、『厚生事業史』は大林宗嗣教授がそれぞれ担当しておられた。さらに外部講師として、『企業福利施設論』は京大の大塚一郎教授が当初嘱託講師で来られていたが、後に専任教授になられた。『勤労管理論』という講義もあった（『労務』という用語は使えないので『勤労』とした）。さらに、竹中教授は『社会政策』と『社会学概論』を担当されたが、後者の講義は経済学科の難波紋吉先生が竹中教授に代わって講義を担当されることもあった。竹中教授は親交のあった大河内一男教授に集中講義を依頼していた。『産業生理学』は吉沢一男という京大の医学部の先生が講師、戦後工学部の専任講師だった市川氏が『労働科学論』を担当。すでに産業関係学の主要科目が出揃っている。『社会保障』は高商の同級で一橋大学を出た佐々生信夫君が同志社に来ると云っていたが、結核

を患って早世したため実現しなかった。それから『産業調査』は、島津製作所の社長で京都経営者協会の初代の会長だった鈴木庸介氏と井口裕氏が担当。井口氏は、島津製作所の労務担当を経て、経営者協会の専務理事を約30年務めた。独書講読は上野直蔵教授（同志社専門学校の校長）が力を入れて担当していた。社会事業における厚生理論の展開については、大河内一男、中山伊知郎、福田徳三、河田嗣郎、風早八十二といった教授陣が外部から応援に来られた。文化政策を担当した大林教授が新聞に力を入れて、将来新聞学を構想しており、朝日新聞からは有名な尾関氏が、京都新聞から社長の白石古京氏が講師として来られた。社会党委員長永末英一の「世論」は有名。

8 荒木貞夫（文部大臣陸軍大将）と同志社厚生学

厚生学設立に関してもうひとつ触れておくべきことがある。それは、当時文部大臣であった荒木貞夫の存在である。1943年（昭和18年）10月、学徒出陣前の秋のある日、荒木文部大臣は同志社に牧野総長と厚生学代表竹中勝男教授を訪れ、学生代表であった私を総長室に呼び、絹縮緬の日の丸国旗に墨書で鄭寧に「丹心抱忠貞 為中條毅君 陸軍大将男爵荒木貞夫書」と認めた（図4）⁽¹¹⁾。荒木文部大臣の態度は極めて優しく、細い目には温かな人間味が滲み出ていた。しかし、出征を控えて死と隣り合わせの状況にあった私には、荒木の同志社来訪の意味は考える余裕はなかった。また、私と一緒に報国団で活動した仲間と同級生の貴志と安田、2年後輩の、戦後、復員学生運動のリーダー大北一夫がいたが、この4人全員が海軍に配属された。とくに大北（戦後、昭和シェ



図4 荒木貞夫文部大臣揮毫の国旗

ル石油社長・会長を歴任)と私は同じ分隊で隣の席となり、教育指導教官は敬虔峻厳なクリスチャン嶋瀬大尉であった。任官後、二人とも駆逐艦(潮・磯風)への乗り組みを命ぜられた。単なる偶然か、それとも何らかの意図が働いたのか、これもよく分からない。敗戦直前、嶋瀬大尉も海防艦艦長としてわだつみに消えた。

戦後、荒木貞夫陸軍大將はA級戦犯として歴史の表舞台から消え去り、裁かれる身となったが、半藤一利氏が代表を務める昭和の近代史研究会が近年発表した研究成果では、荒木は戦時中に吉田茂の新米英自由主義勢力と同盟を組んで、反東條勢力の重要な一角となって戦争終結に向けて活動したことが明らかにされている。荒木貞夫の世界観は、東條首相の戦争推進派と異なってこれと対立し、農村の疲弊、国窮を憂い、5・15事件、2・26事件の若い憂国の士官達の心の支えになっていたこと、その人間的な豊かさ、戦時下の文部大臣としての国際感覚、教育研究に対する視点が再評価されつつある。総長室でお目にかかった時のあの眼差しを想起して、ようやく明るい史的展望をもつことができるようになった(12)。戦時下での軍と民間との連携が掴めなかった背景には、たとえば秋丸報告書の抹殺・燃焼(13)といった「軍の厳しい機密対策」があったと思われる。

上記の文部省から発令された文書に厚生学専攻の主要課題と類似した内容や表現があることに鑑みて、牧野総長の慎重熟慮の決断力と竹中教授のスケールの大きさをもって、進歩的民主的軍人であった荒木文部大臣との連携を模索し、キリスト教主義教育および同志社の危機を厚生学専攻設立の構想によって英知を新しい目標に向って設定し優先の調整に双方が尽力したのではないかと思えてならない。

受け身で堪えること、増して時の軍権力に同調して、学内の不安定、対立の空気を醸し出すことは寧ろ容易な姿勢であったと考えられる。毎日毎夕が緊張の連続であったが「生と死」に追いつめられた生活を前にして貴重な青春、大事な学究生活をどう活かすか、それが新しい学部の体制創出に連なる貴重な道程であったのかと思いを残して戦線に出て行った。

戦争、あの惨事の反動で、戦後、思想は左に大きく揺れたのも事実であろうが、これも戦時下の右傾と同じで自然な動きと考える人がある。高商の旧学友会の学生運動が「戦時下ナショナリズム」と強く結びついたことは述べたが、その一級上のクラスは左翼文献の研究活動リーダーで軍に睨まれ、入隊後陸軍危地の戦線に送られ戦病死した者が二人あったが、今ひとつ上は編笠を被り、臭い飯を食べさせられ戦後は威勢よく論陣を張った学者先輩もいた。戦時は最右翼、戦後は左転向の元気な秀才もいた。「押し迫った戦時下、無理に『資本論』を読むこともなし」と語ったのは、戦艦大和の主計長であったが、永末英一の話では、主計長は戦時下トラック沖の長い停泊中、艦内でゆっくり読了し、太平洋に艦と共に沈めたという。永末は社会学科の「世論調査論」を長く担

当し、吉武教授と共に「同志社ネーヴィ会」の会員であった。私は追い詰められた戦時下、危険を察して、左翼の文献を読むことは控え、生きて帰ればゆっくり読むとしようとも考えたが、それでも特高警察が週に一度は下宿に現れた。貴志、安田の部屋には入らず、私の部屋だけに下宿の小母さんが立ち会いをさせられた。下宿の主は在郷軍人会の京都支部長で迷惑をかけたと思うが、荒木大将に呼び出されたとき、「右と左に挟まれご苦勞、潔く死んで来い」とは云われなかった。「ご苦勞」という言葉だけが残っている。死ねば、この言葉も空に飛ぶ。それにしても、遅れに遅れた2005年の新学部の誕生と優れた学究者たちの眼差しが眩しかった。とくに、大きい希望と期待を待つことができたのは、教育文化学科の力強い参加であった。

9 文学部社会学科の設置

終戦後、労働組合法および労働関係調整法が制定され、各府県に労働委員会が設置された。京都府では、末川博、高山義三、住谷悦治、松井七郎、於保不二雄といった学識経験者が戦後の労使紛争を調整して注目された。復員してきた私は、その事務局での2年半の仕事を通して *Industrial Relations* への関心を強めることになった。同時に、労働問題を取り扱うときには、この「平衡感覚」あるいは「中庸感覚」が不可欠だと痛感した。事務局長は大河内一男先生の同窓生清滝氏であり、局員からは大阪市立大学教授・小川喜一氏はじめ、大阪経済大学学長・玉置保氏と数名の教授が輩出された。

新制大学への移行を控えた厚生学専攻では、神学科の社会事業から進展した「社会福祉学」を育てることを第一義とされ、それが社会学科の主題となった。「誠と愛の結晶」と慕われた碩学・嶋田啓一郎教授を中心に、同志社の伝統的シンボル「社会福祉学」の充実・発展に理想と情熱を注がれることになったのである。この頃、竹中教授がしばしば夜に下宿を訪ねて来られて、一緒に鴨川まで歩こうと誘われた。自転車を曳きながら「早く学校に帰って来い」と再三云われ、結局、給料が大幅に減少するのを覚悟で1949年に大学に戻った。が心のよろこびは特になかった。丁度その前年に社会学科ができて、社会学専攻、社会福祉学専攻、新聞学専攻の3専攻が設置されたところであった。より合い所帯でまとまりがない雰囲気が続いた。

いつだったか正確な時期は忘れたが、社会学科の体系について学科内で議論されたことがある。社会学専攻のある教授は社会学 (*sociology*) が社会学科の基本になると強く主張したが、その他の専攻の教授は、それは *sociology* ではなく *social relations* だと反論した。現社会学部の英語表記が *Faculty of Social Studies* であることと淵源のつながる話である。*academic* な論議と評価され、*eccentric* も調整された。

神学科の伝統ある社会事業は、戦時下の軍権力の圧力下、至難の史的討議を経て戦後

は社会科学としての「社会福祉学」へと *aufheben* する道程があった。牧野総長が辞任され、竹中勝男教授は社会党の参議院議員（参議院文教委員長に就任）となって同志社を去られた後、嶋田教授が「社会福祉」を広範な概念で捉え、私は社会政策、労務管理論を基礎に「労働福祉」に重点をおいてゼミを進めることになった。さらに、新進気鋭の小倉教授をはじめとして、大塚、井垣、住谷の優れたメンバーが加わり、社会福祉専攻は一層充実された。そうこうしているうちに嶋田教授の了解・奨励を得て、社会福祉から労働福祉の独立を考える時期を迎えた。社会学部への充実・発展は、戦時下から考えていた目標であった。私は、「労働福祉コース」（未だ規定化されていなかったが）を産業関係学（労使関係論）専攻として、現代産業社会における基本問題としての雇用問題を統括・整理することを念頭に置き、既存の3専攻と合わせて4専攻とすることによって社会学部へ進展させようと構想していた。哲・史・文を包括する伝統的文学部に対して社会学部として纏める方が時代の動きにマッチし、学生の志望も明確になると、戦時下の学生自主講座時代から考えていた。しかし、戦時下の主唱者の主体、竹中勝男は無く、敗戦後の荒廃・無秩序の人間事情の中で急造された三専攻、新しい学部への創成には膨大なエネルギーと歴史が介在した。この取組みは荆棘の道であった。

10 留学（イリノイ大学労使関係研究所他）

産業関係学専攻創成に向けて、そのサンプル収集を兼ねてイリノイ大学労使関係研究所に留学した。年齢 39, *visiting professor* の孤独な米国上陸であった。駆逐艦の対空指揮官として戦線に加わりながら辛うじて戦死を免れた男の米国留学⁽¹⁴⁾。苛烈な戦闘そして敗戦後の留学は、何とも辛い日々であった。その不安とは裏腹に、貨物船上から初めて見たその光景、街を行き交う自動車の多さにこれは夢かと思ったものだ。

当時の労使関係学のメッカはハーバードでも MIT でもなく、重工業、とくに自動車産業の中心であったミドル・ウエスト、シカゴ周辺であった。イリノイ大学 IR 研究所には、隅谷三喜男、小池和男、森五郎といった教授達が次々と訪れており、彼らの関心は「日本の労使関係研究」の先駆者 Solomon Levine 教授に集中していた。戦時中に対日海軍特任士官⁽¹⁵⁾であった Levine 教授は日本語が堪能で、鄭重に私を迎え入れてくれた。また、敗戦後の日本の様子について話を聞くため数人の学生が私の研究室によく訪れてきたものだった。その中の一人で化学を学んでいた大学院生が、後のジャック・ウェルチ GE 会長であった。当時、米国では *Industrial Relations* が隆盛をきわめ、40校を超える主要大学に労使関係学研究所が設置され、労使関係博士も輩出されていた。しかし、イリノイ大学は労組的傾向が強いことを懸念していた Levine 教授等からは、サンプルを収集するのなら思想的に中立で労使関係学博士を9人擁するミネソタ大学の方

が適切だろうとの助言を受けた。Levine 教授も、後にウイスコンシン大学に移っている。実際にミネソタ大学を訪れてみると、地味ではあるが堅実に研究を進めている点に共感を覚えた。しかし、アメリカと日本の労使関係のあり方に少なからず違いを感じていた私は、Industrial Relations⁽¹⁶⁾の根源といえる英国に渡り、残りの半年間をロンドン大学で研究することにした。つまり、カリキュラム構成等の枠組みは米国の大学を範としたものの、Industrial Relations という学問のあり方については英国にその真髄を求めたのである。幸いにも、海軍同期の森嶋通夫氏がロンドン大学教授となっていたので、彼に多方面にわたって便宜を図ってもらった。

パルチザンゲリラの満鮮国境で働いた満州への飛躍は専ら人生体験や人間性の追求であり留学とは性質を異にしていたが、いずれにしても海外生活は実り多き経験となった。『産業関係学研究』（中央経済社）は米国留学の成果報告書であり、IR のモデルはミネソタ大学そして一部コーネルの大学であり、立教大学の逸材武沢信一教授に智恵を借りた。彼の尽力には慶応大学の石坂巖氏と共に謙虚な実力者に心底から頭が下がった。

11 産業関係学・学科・社会学部の設立

留学から5年を経た1966年（昭和41年）、文学部社会学科に産業関係学専攻が設置された。青春が甦り心温まる思いであったが、この頃から学生ストが全国に広がり講義ができない時期が長く続いた。産業関係学専攻の設立にあたって、海軍同期の角田豊氏に声をかけたところ、「よし行くぞ」と二つ返事で応じてくれたことはいまでも忘れられない思い出である。一高、海軍予備学生時代を通して厳格さとスマートさを貫いた労働法学者であったが、体調は幾分すぐれないようだった。軽井沢にある有斐閣の山荘で夏に合宿してIndustrial Relationsの展望を論じ合った際、体調は回復したかに見えたが、それも長くは続かなかった。枚方病院で強く私の手を握って天上の人となった。真摯の顔が残っている。

産業関係学専攻の創設時、S. Levine 教授が祝福のためウイスコンシン大学から同志社大学を来訪し、労使関係学会の代表者・森五郎慶応大学教授と共に産業関係学専攻1期生に特別講演を行ってくれた。学生ストで明け暮れた中の快事であった。当時、同志社大学には産業関係学の学位論文を審査する博士過程が整備されていなかったため、Levine 教授からウイスコンシン大学への学位論文提出を促されたが、すでに森教授から同旨の勧めがあったため、博士論文は慶応大学に提出することになった⁽¹⁷⁾。

その後、私は人文研所長に就き、日本労務学会や労使関係学会の活動が忙しくなり、職安審議会や家内労働審議会等、外部の仕事も増えて忙殺の日々が続いた。しかし、産

業関係学専攻は、神学部の竹中正夫教授を中心に同講師の平田哲氏と共に、産業社会における労働福祉、合理的労使関係の確立を目的として、1969年に関西セミナーハウスを会場としてIMF-JC（全日本金属産業労働組合協議会）労働リーダーシップコースを創設し、労働省、基幹労組、経営者協会の協力を得て43年間にわたって全日本の基幹労組の幹部リーダーの教育活動に情熱を傾けてきた。竹中正夫教授（竹中氏はエール大学で学位を取得し、ハーバード大学の講師を勤めた）は「労組リーダーとしての人間性、倫理感の追求」を説かれて信望を集めた。Creative Leader と私は評したい。竹中教授と二人で『労働と人間を考える』（中央経済社、1994年）という一冊の本を著した。松下幸之助の講義（1969年（昭和44年））から始まり、亀井正夫、隅谷三喜男、高坂正堯等々、故人の名講義や論文も含まれている。やるべきことを成し得た人は天の人となり、後世の人を鼓舞する(18)。

結 び

この稿は戦時下を主体とした同志社の社会学部創設の苦闘の経過を軸に書いたが、その中で、問題として取り上げたかった主題は、新島キリスト教主義教育に対する軍の攻勢に対し、牧野総長、竹中勝男教授が対応した苦節の creative な史的成果であった「厚生学」なるものの存在と背景である。所謂、知見の不足、多岐性、統合性に欠けた軍細胞幕僚（統制派）の血気、情熱の大きい危機の渦中であって、軍権力の中でも、これをチェックし対立苦闘した優れた世界観、豊かな人間性が存在したことが明らかになった。

東條を主体とする統制派の理不尽の強行に対して敗戦に至るまで終始、対立活動を続けた皇道派の荒木貞夫の真髓が軍事裁判により最近、漸く明らかにされたからである。

権力は必ず減じる。そして権力は必ず機密を抱く。

軍権力の厳しい機密対策が、まず「日米開戦の大失態」に連なったが、「秋丸機関報告書（1939年作成）」に対して、杉山元参謀総長の無謀な決断は敗戦後の1998年に、漸く、公にされている。

荒木の戦時下のたゆまざる努力に対しても当時の東條軍権力の厳しい機密対策が背景にあった。「2・26事件後、陸軍から追われたが皇道派の荒木らは、昭和10年代（1936年）以降の政治的エース近衛文麿と連携し政治勢力として生き残り、何人かの大臣を出し（例えば小泉厚相等）、太平洋戦争中には、吉田茂らの親米英自由主義勢力と同盟を組み反東條勢力の重要な一角をなし戦争終結の活動をした。」（半藤一利他昭和史研究家文芸春秋）

荒木等の反勢力が文部行政として同志社の厚生学をどう捉えていたかの分析、考察

は、今後の課題として残された。

歴史から未来を読みとり、今後の展望考察の資とする「国民性の欠落」を切実に憂い考えさせられる 21 世紀初頭の日本である。

註

- (1) 牧野総長は雄辯なキリスト者にして柔和なおじいちゃん。ひとり息子は大学で私と同学年、同専攻、明るいバスケットボールの選手、修氏で、学徒出陣に先んじて、海軍神風特攻隊の大尉として壮烈な空の戦死を遂げている。想えば、慶応大学総長小泉信三氏の御子息で海軍主計大尉であった信吉氏も南太平洋の駆逐艦で戦死を遂げている（小泉信三『海軍主計大尉小泉信吉』昭和 21 年 5 月文芸春秋刊）。
- (2) 戦時体制が強化されるにつれて、戦線への学徒出陣動員令が大きく 2 つの時期に分かれて、順次発令された。その前に、当時の学制についての説明が必要であろう。就学年数は、6 年（小学校）、5 年（中学校、商業学校、工業学校）、3 年（高等学校、大学予科、高等商業学校および高等工業学校等の専門学校）、3 年（大学）であり、21 歳になると兵役があった。在學生には兵役延期の特権が与えられたが、それは戦時下の動員令で姿を消すことになる。

第 1 段階 学徒繰上げ卒業と戦線動員

高等商業などの専門学校の学生で 1942 年（昭和 17 年）3 月の卒業予定者は、前年 12 月に繰上げ卒業となり直ちに入隊、戦線に送られた。但し、成績・年齢を考慮した上で、一部の学生は大学進学が許された。これ以降、兵役を免れるために大学進学者が急増した。なお、旧制高等学校の学生には、東京大学または京都大学に進学する特権が全員に与えられた。

第 2 段階 学徒出陣

1943 年（昭和 18 年）10 月 21 日「在学徴兵延期臨時特例」が公布され、主に文科系の大学、高等学校、専門学校などの学生、生徒の徴兵猶予が停止され、10 万余人が学徒出陣した。しかし、理工系学生には徴兵延期が維持された。明治神宮外苑競技場では壮行会が行われ、京都では御所建礼門前で分列行進が行われた。

- (3) 当時の大学は予科と本科に分かれており、予科の就学年数は、中学 4 年の飛び級入学の場合 3 年、中学 5 年から入学した場合 2 年で、本科の就学年数は 3 年であった。高等商業の就学年数は 3 年で、卒業後は大学本科に進学することができたが、戦時下のため私の学年から高等商業からの進学がほとんどできなくなった（成績上位 1 割のみ進学が許された）。さらに、高商からの進学は文学部厚生学専攻のみに限定されたことから、却って「学生自主講座」の主体性が強化されることになった。
- (4) 薩長土肥、四国、九州勢と山陽道を主体とする地方学生で占められた柔剣道部を中心に各運動部は洛北岩倉の原野で合宿生活をする学生が多かった。同志社高商は柔剣道等の古来のスポーツが主体であったが、関学高商はたとえば、サッカー等のボールを使う近代スポーツに優れていた。また、同志社高商は日本固有の軟式テニスが強く、関学高商は硬式テニスが強かった。関学はカナダ人、上智はドイツ人による創立であるが、同志社は明治初期の福沢・大隈と並んだ新潟島の三大校祖の古い大学であることが戦時下の動きに影響しているかもしれない。柔剣道部は、確かに優れた戦績を挙げ運動部でリーダーシップをとっていたが、強いだけではなく学業も優れた人物がいて、躰も整然としていた。
- (5) 私達の学年が 1941 年 12 月に学業を中断、卒業を繰り上げて戦線に出されたことに因んで、同窓会の名称を同志社高商「12 月会」としている。軍権力、「生と死」に追いまくられた青春であった。
- (6) 川島良一教授は、明治 27 年新潟県長岡市の生まれ、大正 2 年同志社普通学校、同 6 年 6 月同志社大学経済学科卒業後、第一銀行京都支店勤務、同 8 年から翌年までアモスト大学、その後 9 年 7 月から 14 年 8 月までコロンビア大学大学院に在学。経済学を研究、帰国後、昭和 6 年から 11 年 4 月教授を経て、昭和 19 年 3 月辞任に至るまで、同志社高商教授として、取引所論、商業経済論、貿易論、経済政策論、英書購読を担当。野球部長としても活躍され、教育・訓練の厳正さでは抜群であった。その

後、松下飛行株式会社を経て、昭和20年10月松下電器産業株式会社に移り、松下労働組合の結成にかかわり、教育宣伝担当、さらに経営者、従業員の教育訓練、松下工学院の創設に携わり、昭和40年松下工学院院長として、労務、技術者の基本教育に徹した。さらに7年間、ヤンマーディーゼル株式会社の教育顧問に就任すると同時に、同志社大学産業関係学の「労務研究会」を私と共に組織し、「労使官学」から成る研究組織を大学から民間の労使に拡大した。さらに、川島氏が収集した蔵書1,200冊が産業関係学専攻（現産業関係学科）に寄贈され、社会学部事務室の地下4階に「川島文庫」として保存されている。川島文庫は教育訓練、人事労務分野の資料が多く、川島良一氏の没後（昭和61年）、アヤ夫人は文庫整備費300万円を寄付、香川孝三教授が研究室の中村さん、恒藤さんの力を動員して整備にあたった。とりわけ、御長男の川島良二氏（京都大学農学部長）のご支援・ご援助には誠に頭の下がるご指導をいただいた。感謝の念を忘れない。また、川島教授には松下幸之助氏を御紹介いただき、その折に、松下氏が「戦争の話をするのを忘れるな」と云われたのが印象的であった。

- (7) 1933年（昭和8年）頃から統制派幕僚将校の軍内部での発言力が強くなる。少壮士官の知見の不足、多岐性・総合性に欠ける戦闘体勢、所謂「幕僚統帥」が敗戦への道に連なった。東條と辻政信、服部卓四郎（関東軍参謀）との結合は、文部大臣荒木と対立したままであった。荒木貞夫は「日本の政治のあり方が健全性を欠く」と主張しており、軍人が政治に直接関与することに強く反対した。しかし、文部大臣としての荒木の意見は多岐にわたり活用されている（昭和史研究科グループ）。東條の支援もあって、長州藩閥の地縁・血縁中心から陸軍士官学校や陸軍大学の優等生重視という一種の民主化の時代を迎える。社会的体験の少ない視野の狭い純粹培養の優等生幕僚が軍の核となって日本の戦時体制を引っ張るといふ、いわば下克上組織の萌芽期であった。
- (8) 社会学科設立時に、田畑忍教授や岡本清一教授が中心になって文学部から法学部への移籍が議論されたことがある。法学部は、法学部政治学科、法律学科、そして社会学科の設置を検討していたが実現しなかった。
- (9) 一方、風早八十二氏の社会政策は分配政策として階級制があったことから、戦時下軍権力にチェックされた（風早八十二「日本社会政策史」1937年、日本評論社）。風早氏は、日本におけるマルクス主義法学の先駆者の一人とも云われ、1932年の末、野呂栄太郎（「日本資本主義発達史」1935年、岩波書店）らの勧めで日本共産党に入党、治安維持法違反で検挙、1935年に出獄後、講座派の一人として社会政策理論の研究に専念、1938年には「労働の理論と政策」を刊行して生産力理論を提唱し、大河内一男教授と共に活動した。風早氏の専門は、社会政策論の他に刑事法で衆議院議員、弁護士として活躍した。野呂、風早両氏の著書は戦時下の1942年当時、自主講座で取り扱うことは許されなかったが、個人的に読んで討議の資料にしていた。
- (10) 高商時代、隣に下宿していた同窓生の佐々生信夫は思い切って上京し、山田雄三（社会保障論）の門下生として城山三郎氏と親交を結んだが、一橋大学の専任講師で助教授を前に結核の重病を患い、30歳で黄泉の客となった。他の進学先としては神戸大学が多く、7人、九州、東北、台北の各帝国大学に受験した者も全員進学した。
- (11) 「丹心抱忠貞」とは、丹心は赤心まごころ、忠貞は忠義と貞節で、真面目で行いが立派なこと、という意味である。出征を目前に控えた私は、このような言葉をもって陸軍大将文部大臣に褒められたが、それは直ちには真実と受け止めることができなかった。というのも、中等学校での操行、教練、体育の成績はすべて乙以下の成績であったからだ。また、日本で最初の商学博士藤本幸太郎を輩出した古い歴史をもつ四日市商業学校に全科目満点で入学したものの、上級生になって左翼ロマンティストの商大生と交流し、処罰こそは免れたが、行き詰って満州逃避の前歴となった。同志社では、その修復の思いだけは切実にあったのだが、これも宿命であった。
- (12) 陸軍将官では、荒木貞夫（陸軍士官学校9期）、真崎甚三郎（同8期）、林銑十郎（同8期）等が注目されたが、なかでも荒木は人間の魅力という点で突出していた。2・26事件まで皇道派の中心リーダーと目され、東條英機の統制派と対立。荒木が首相であれば、戦争の拡大、とりわけ中国・米國との戦いは無かったとも評される。荒木の戦場体験は、例えばロシア革命時にロシア軍に従軍して革命の全容を見届け、シベリア出兵時にはウラジオストックに参謀として派遣され、第一次大戦では従軍武官で英国軍と共に行動して塹壕戦を経験している。東條と全く異なって多様な実戦経験をもつ尊敬に

値する人物と論じられている（作家、半藤一利を主体とする昭和史研究グループ、文藝春秋）。国立公文書館の A 級戦犯釈放後の聴取綴東京裁判記録の資料は公開されず（一部の研究者にのみ開示）、マイクロフィルム化により、ようやくに日の目をみたのは 2008 年秋ごろからと思われる。

- (13) 1939 年 9 月、関東軍参謀本部で満洲国の建設主任だった陸軍中佐・秋丸次朗は急遽帰国し、「戦争経済研究班」（秋丸機関）を取り仕切って報告書（秋丸報告書）を作成した。英米との戦争に耐えられるか、分析を命じられた秋丸中佐は、有沢広巳（東大）、中山伊知郎（一橋大）等の著名な学者を集め、厳密な調査を行った。調査対象は人口、資源、海運、産業などに及び、正に英知を結集した分析であった。調査開始から 1 年半を経過した 1941 年半ば、日米開戦の数カ月前に陸軍首脳陣等に対する報告会が催され、秋丸中佐は決意を示して報告した。「日本の経済力を 1 とすると英米は 20。日本は 2 年間蓄えを取り崩して戦えるが、それ以降経済力は下降線を辿り、英米は反対に上昇し始める。彼らとの戦力格差は大きく、持久戦には耐え難い」。秋丸機関の結論であった。列席したのは杉山元参謀総長等陸軍の首脳約 30 名。杉山は耳を傾けていたが、ようやくして口を開いて「報告書はほぼ完璧で非難すべき点はない」と経緯を評しながらも、「その結論は国策に反する。報告書の謄写本はすべて焼却せよ」と命じた。秋丸は報告書の写しを回収・焼却し、有沢教授等は直ちに活動から手を引くよう命ぜられた。その有沢報告書の一部（104 頁の詳細な報告書）が、敗戦後 40 年以上経過した 1988 年に、有沢の死後に遺品の中から発見されている。
- (14) 学徒出陣組で大学教授になった者は稀であり、同志社では私一人であった（理工系は学徒出陣なし）。戦後、捕虜収容所長を務めたオーティス・ケーリ教授もかつて米国特任海軍大尉であり、同志社の教授となってからは「同志社ネーヴィ会」の会員となって交友を温めた。
- (15) カリフォルニア大学バークレー校の教授にも数名の特任士官がいて、互いに無事であったことを日本語でよく話し合った。また、東日本大震災の直後、日本に帰化したロナルド・キーン教授も同様の特任士官であった。
- (16) 産業関係学（Industrial Relations）は Interdisciplinary = Co-disciplinary = Multidisciplinary という特徴を有して、経済学・社会学・心理学・法学・歴史学等が交差する学問であり、経済学とは別個の学問だと説かれる（ハーバード大学教授・J. ダンロップ）。英国では経済学を基礎とし、仏では産業社会学、独では法学と社会学、その他の国では法学の領域に含まれる。立教大学は一流の社会学者・心理学者を結集しており、学部創設の中心であった武澤信一ゼミと中條ゼミとで 20 年間にわたってインターゼミを行い、毎年約 150 人が合宿・交流を行った。近年では学会や学問体系の専門化・細分化が進み、問題全体を俯瞰して発言できる人がいない状況（幕僚統帥に似た状況）を指摘する人がある。労使関係 = 雇用問題は、現代の産業社会・産業構造の複雑な変化により、大きな社会問題・政治問題となって收拾がつかない広がりを見せている。
- (17) 当時の小倉文学部長の説明として「社会福祉学専攻の労働福祉の論文」として中条論文を慶應義塾大学商学研究科委員会に提出し、その結果「同志社大学社会福祉学専攻の大学院博士課程」の設定が文部省から正式に認定された。社会学科では最初の事と報告を受けた。
- (18) 神学部社会事業との関係はこのように外部で残され労使官学との研究を通じての密接な関係は重要課題として産業関係学科に残され継続している。